

国語総合(古典を除く)、現代文B

ページ	解答番号
国1～国10	1～24

問題1 次の文章を読んで、後の各問に答えよ。

サン・マルコ広場から東の方へ、裏通りを伝い、いくつかの運河をわたって、〈あわれみの小運河（リオ・デルラ・ピエタ）のほとりにあるこのこじんまりしたスクオーラを見つけ出すのは、ちよつと骨が折れる。その代わり、入口に下げられた厚いカーテンをぐぐりぬけて内部の絵を見るのは、(1)箱のなかに収められた絵巻物を包んでいる布をまずひろげる感じで、美術館で見るのとは、また違った味わいがある。

順序があとになったが、絵の話になるとどうしても〈スクオーラ〉が出て来るので、ここで少し、説明しておこう。このことは普通には〈学校〉を意味するが、ヴェネツィア史の上での特殊な用語としては、共通の利害でむすばれた人びとが、守護の聖人に対する信心および相互扶助の目的で集まった組織、そしてその教会堂を、ともに指している。〈講〉とか〈講社〉と翻訳すると、神道や仏教の匂いが強すぎるかもしれない。〈同信組合〉という訳語も、まだ落ち着かない気がするが。

スクオーラの制度は十三世紀のなかばにはじまり、十六世紀には、サン・ロッコ等六つの〈大スクオーラ〉以下、およそ二百の小スクオーラを数えるほど盛況だったという。その性格からいうと、三つの型があった。第一は、ダルマチア人、アルバニア人、ギリシア人などの、ヴェネツィア在住の少数民族のグループ。第二はさまざまな業種の職人たちが、自分たちの仕事に関係のある聖者の名の下に集まった組織。第三はサン・ロッコのように、疫病が大流行した時代に、その予防と治癒に(A)御利益があるとされていた聖者を信仰する団体である。

これらのスクオーラは、画家たちにとっては、大切な注文主だった。おそらく、教会の注文で描くよりも(2)画題には幅があるし、表現上の制約もゆるやかな、好ましいおとくいさんだったのだろう。なかでもカルパッチョは、スクオーラの仕事が多かった画家である。いまはアツカデーミアにある『聖オルソーラ』の連作も、もともとは、この聖女の名をいただくスクオーラのために描かれたものだった。

サン・ジョルジョのスクオーラの薄暗い室内には、龍退治の聖ジョルジョをはじめとしていくつかの聖人伝や、『福音書』に拠った作品が、日本家屋でいうなら(B)欄間の高さに掲げられている。聖画といっても、これらの絵の内容は、おとぎ話の挿絵に出てくる風景に近い。注文主である、アドリア海東部から来たスラヴォニア人たちには、船乗りが多かったはずだが、彼らはこの愛らしいカルパッチョの絵によって、ほんとうに、自分たちの信仰を強めることができたのだろうか。

特に聖ジョルジョの龍退治の絵で、見る者の内にいる〈子供〉をよろこばせるのは、ハンサムな若者の聖者と、東洋人の感覚でみるとひどく小ぶりな(C)翼竜がたたかっている姿以上に、龍の餌食となつて、地上にちらばっている女たちのむくろである。風化した腕や脚。下半身がちぎれた女の胴体。白い骨やどくろ。くろずんでミイラ化した頭を、もぎとられた足が蹴っている。その間を動いているとかげや蛇。滑稽で、残忍で、愛らしい死の破片が、ひとつひとつ、何とくつきりと描かれていることだろう。

(3)美術批評家のなかには物神崇拜というこぼれを使う人もいるほどの、カルパッチョの細部への愛着は、『聖アウグスティヌスの幻視』では、より日常的なぬくもりを帯びる。この絵のなかで、書斎にいる修道士風の聖者は、ながいこと聖ヒエロニムスとして通っていたが、今日では聖アウグスティヌスが、窓の外に聖ヒエロニムスのまぼろしが現れたのを見ているところだと、解釈されている。

彼はさまざまな書物と、文房具と、調度品にみちた、居心地のよさそうな書斎に座って、窓の外を眺めている。床の上には、あの大運河の絵でゴンドラに乗っているのと同じ白いむく犬が、お行儀よく座って、

聖者と同じ方角を眺めている。

それにしても、何と日常的な奇蹟きせきだろう。落ち着いた書齋のなかで、使いなれた家具や文房具の配置もそのままに、ふと窓の外に目をやれば、ヴェネツィアの光とたわむれながら起こっている奇蹟。かたわらの子犬にさえ見える奇蹟。――

スクオーラにある数々の絵のなかでも、カルパッチョのデザイン感覚が際立って映るのは、『聖ヒエロニムスと獅子』である。老聖人がライオンを従えて現れたので修道僧たちは仰あが天し、右へ左へと逃げまどっている。白と藍緑の修道衣がひるがえって作るいくつもの三角形の配置が、画面にぴたりときまって、目を惹ひきつけずにはいない。いつもこの絵の前に立つと、私は、一世紀あとに描かれた俵屋宗達（＊江戸時代初期の画家）の『舞楽図』屏風びようぶを思い出さずにはいられなかった。人形めいた人物のストップ・モーションと、あざやかな空間処理に、共通点を見出すからだろう。

しかしこの絵の前景は俵屋宗達風でも、後景には修道院の周辺がカルパッチョ流にことこまかに描き込まれ、この部分はむしろ、洛中らくちゅう洛外らくがい図屏風である。前景で修道僧たちがあわてふためいているのをよそに、後景ではほかの僧たちや、オリエント風の服装の市民たちや、孔雀きよくや鹿などの動物たちが、おだやかに日常の時間を味わっている。そしてあの大運河の絵のなかで、ゴンドラのにぎわいの上に高々と掲げられて私たちを微笑させた洗濯ものが、ここでもまた、丈長のゴシックの窓の下に干されて、壁に影を落としている。……

奇蹟きせきが行われようと、あり得べからざる光景が出現しようと、人間のいるところ、洗濯ものはつねにひるがえる。宗教画のなかにさえ日常性の記号を小さく、しかしはつきりとするさずにはいられなかったカルパッチョは、ヴェネツィアの彼の同胞とともに、狂信からは、ほど遠いところにいたのだらう。

サン・ジョルジョのスクオーラのカーテンのなかからまちに戻るとき、私は周囲に、(4)スクオーラの内部と同質の世界がひろがっていることを感じる。それはサン・ロッコ内部に渦巻く力の誇示が、ヴェネツィアに対する敵意に満ちているように思われるのと、対照的である。水のなかから立ち上がり、細長い窓や大理石の環わ飾りをファサード（＊建物の正面）に並べている屋敷のつらなりは、つくりものか、書き割りめいていて、しかしまぎれもなく現実であり――それはまさに、カルパッチョの絵のなかの風景なのだ。渦の上に桃色の月が上り、元首宮殿の上につらなるぎざぎざの胸壁飾りが、符牒ふだを合わせたように同じ桃色に暮れ残って、厚紙細工のお城のようにみえるとき、ヴェネツィアはカルパッチョの絵と同じく、デイズニールランドすれすれの線上にあるように思える。

しかしヴェネツィアがデイズニールランドにはならず、カルパッチョの最良の作品が、おとぎ話の挿絵に近づきながら、きわどいところで甘さをつき抜けて、異なる時空のなかへ駆け入るようにみえるのは、双方が(5)「オリジナルのつくりもの」だからである。デイズニールランドや絵本の挿絵のように、すでにある建物、すでにあるイメージの複製ではなくて、つくりものの原物、そのものなのだ。ここにあるのは、現代のレジャー空間の、清潔で、衛生的で、老いと死と腐敗をもたらす要素はすべて滅菌されたあとの、むなくしく明るい風景ではない。カルパッチョの愛らしい騎馬武者と龍の戦場には、変質しつつある死体が転がっている。そして渦のなかのまちは、朽ちてゆく無数の木の脚を水のなかに浸しながら、よろめき、老いて行く。（ここで私はまた『聖ヒエロニムスと獅子』の絵の前にもどって行く。逃げ出してゆく修道僧のひとりの、白い衣の裾からは、まったく木製の義足しかみえない。ほそい、奇妙な足が、不自然な角度で突き出されている。あれはまるで、ヴェネツィアのまちを水面下で支えている無数の木の杭くわの一本が、引き潮で露出したようだ。）

しかし〈文化〉に関心をもち出した政治の力によって、まちにも絵画にも、〈修復〉が盛大に進められてしまったら、その結果は、どうなるだろう。必ずしも喜んでばかりはいられない。絵画のたびかさなる修復は、たいてい、アツシジのジョットのフレスコにみられるように、原画のタッチや色彩の生命を奪い去って、後世に伝えられるものは画題と構図だけ、という無残な結果をもたらしてしまうからだ。いわば原物が原物であるままに、なぞられ、複製化してしまうのである。モザイクの場合は〈修復〉という言葉が絵画よりもごく自然にうけとられるが、結果はやはり、かんばしくない。私は気づかないでいたけれど、メアリ・マツカーシーの皮肉な紀行文『観察されたヴェニス』によれば、あのトロチェッロ島の壮麗なモザイク、特に『最後の審判』は、細片が古くて凸凹があつた頃の深さとかがやきが、修復によって失われてしまった、と、専門家の間では不評を買っているそうだ。

修復された建築も、模造品のあじけなさを免れ難い。左右の二つの塔と、三角形の胸壁飾りをいただいて早々と復元されたトルコ人商館には、ヴェネツィアの最も歴史的な建築のひとつとしての、魅力はない。また乗合船が大運河の蛇行に沿って向きを変えるとき、目の前に迫ってくるカ・フォスカリの巨大な窓の連続アーチは、よく見れば〈修復〉によって、生命を失っている。

歳月がたつうちに、修復に修復をかさねたはてのカルパッチョの絵は少女ごのみのイラストに変質し、ヴェネツィア全体が、デイズニランド同様の複製都市になり変わってしまうのかもしれない。いや、十九世紀なかばにラスキンがヴェネツィアとカルパッチョに心奪われたときにくらべれば、二十世紀末の私たちが見ているものは、すでにかんがりの悲しき複製化の結果だろうと思われる。本来、美しいものの寿命は、ドイツ人商館にジョルジョーネが描いたフレスコのように、自然と時の力におだやかに従いながら、かき消えて行くべきもののなのだろう。しかし、〈文化遺産〉に対する認識と、復元の技術の進歩と、そして平和とゆたかさといった、さまざまな条件がかさなった現代では、美しいものたちにも尊厳死はゆるさず、植物人間のような状態となっても、延命を強いられてしまうのだ。

本質的につくりものの要素を持つカルパッチョもヴェネツィアも、複製へのつくり替えへの一歩手前で、自分自身の生命力をきわどく保ちながら、その危うさの魅惑によって、一層、人の心を惹きつけてやまない。

(矢島翠『ヴェネツィア暮し』、原文を一部修正)

問1 傍線部(1)「箱のなかに収められた絵巻物を包んでいる布をまずひろげる感じ」の中で述べられている「感じ」の説明として、適切でないものを、次の①～④の中から一つ選べ。(解答番号1)

- ① 秘めやかな感じ
- ② 親密な感じ
- ③ さつくばらんな感じ
- ④ うやうやしい感じ

問2 傍線部(2)「画題には幅がある」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。(解答番号2)

- ① 大画面の絵が描けるということ。
- ② 長いタイトルを付けることができるということ。
- ③ 豪華な額縁が使えるということ。
- ④ 絵の主題の選択に自由の余地があるということ。

問3 傍線部(3)「美術批評家のなかには物神崇拜ということばを使う人もいるほどの、カルパッチョの細部への愛着」にある、「細部への愛着」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。(解答番号3)

- ① 細かな物体の中に本当の神がいて信じ込んでいるということ。
- ② 細部までくつきりと描くことを大切にしているということ。
- ③ 全体を忘れて、部分に執着しているということ。
- ④ 目を背けたくなるような醜いものを、好んで描き込んでいるということ。

問4

傍線部(4)「スクオーラの内部と同質の世界がひろがっている」の中で述べられている「同質の世界がひろがっている」とはどのようなことか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。(解答番号4)

- ① 絵に描かれているのと同じ雰囲気の実景がひろがっているということ。
- ② 描かれた絵のような人工的な空間がひろがっているということ。
- ③ デイズニーランドを思わせる風景がひろがっているということ。
- ④ スクオーラの内部はその外部と連続的であるということ。

問5

傍線部(5)の「オリジナルのつくりもの」という性格をもたないものを、次の①～⑤の中から二つ選んで、数字の若い順番に答えよ。(解答番号5、解答番号6)

- ① ヴェネツィアという都市
- ② カルパッチョの『聖ヒエロニムスと獅子』
- ③ 絵本の挿絵
- ④ 宗達の『舞楽図』
- ⑤ 何度も修復された絵画

問6 二重傍線部(A)～(D)の語句に含まれる漢字と同じ読み方をする漢字を含む語句を、次の各群の①～④の中から、それぞれ一つずつ選べ。(解答番号7～10)

(解答番号7)

- (A) 御利益 ① 益虫 ② 御意 ③ 役得 ④ 利酒

(解答番号8)

- (B) 欄間 ① 観劇 ② 回覧 ③ 間隔 ④ 圧巻

(解答番号9)

- (C) 翼竜 ① 羽化 ② 卓見 ③ 抑揚 ④ 竜巻

(解答番号10)

- (D) 仰天 ① 添削 ② 信仰 ③ 教徒 ④ 強情

問題2 次の文章を読んで、後の各問に答えよ。

日本の文化は、見立ての文化といわれるほど多くの見立ての形に託した造形や美学があり、日本人の美意識を高めてきた。

見立てとは、ある形を別の形になぞらえることである。見立てというメタファー（隠喩）を巧みに用いることによって自分だけの世界をつくりだし、創造性を掻き立て、これを理想とする見立てのモデルに近づこうとする(A)きがんや縁起かつぎの、人間の根源的な願望の形ともいえる。

こうした見立てを利用したメタファーの形の位相は、日常的にもしばしばみられるが、実は日本文化の特徴にもなっている。

盆栽は自然の風景を小さな鉢の中に再現した見立ての技法の芸術であり、庭は大自然を自己の自由な場所に人工的に再現したスペースである。日本には枯山水という庭の形があるが、これは岩は雄大な山々であり、時には伝説の須弥山や蓬莱山をイメージし、砂は大海を表す。竜安寺の石庭を訪ね、縁側に座り、岩や筋目の入った砂原を時の経つのも忘れ凝視していると、大海にそそり立つ山に見える。次の瞬間には穏やかな海面と山々を思い起こすから不思議だ。

また、日本の祝いの席は人々のさまざまな願いが形となって現れる場でもあり、見立てのオンパレードとなる。正月の料理はその典型で、昆布巻は巻物Ⅱ文化、教養であり、きんといは金色Ⅱ財を表し、黒豆はまめに働くⅡ労働を見立て、数の子は沢山の卵の数から子宝、鯛は目出度いのように、とにかく見立てづくしのメニューである。

このように語呂合わせや、風が吹けば桶屋が儲かる式の発想まで、見立てによる縁起は、きわめて庶民的で直截的な願望が人々の原点にあるようだ。

歌舞伎や浮世絵でも、物語や(B)こじの登場人物を当世風の登場人物に置き換えた「見立てもの」や「見立て絵」があり、このことを知らずに鑑賞しては、何のことか理解できず、つつい居眠りしてしまう。

しかし見立て文化の真髄は何といっても日本の茶の湯であろう。茶室は大宇宙、露地（*茶室の庭）は自然の風景、生け花は野の花、井戸茶碗の釉薬の流れやひび割れは景色そのものである。つまり茶道には見立ての形が集積した総合の美があり、茶の湯が総合芸術といわれる所以である。

もともと茶を飲むという(C)しよさ、作法は、人の道の生き方そのものの見立てなのかもしれない。こうみると日本文化の原点は、まさしく見立ての発想による創造の心なのである。

（三井秀樹『形とデザインを考える60章』、原文を一部修正）

問1 二重傍線部(A)～(C)を漢字にしたときに含まれるものと同じ漢字を含む語句を、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選べ。(解答番号11～13)

(解答番号11)

(A) きがん

① 祈念

② 起床

③ 頑健

④ 含蓄

(解答番号12)

(B) こじ

① 個人

② 辞職

③ 故郷

④ 次元

(解答番号13)

(C) しよさ

① 場所

② 処理

③ 審査

④ 諸氏

問2 次の解答番号14～17の文章を読み、本文の内容と一致するものには「①」を、そうでないものは「②」を、それぞれマークしなさい。(解答番号14～17)

(解答番号14)

見立てを利用した造形や美学は、何も日本に限ったことでない。

(解答番号15)

見立てというメタファーは、今日では茶の湯のように高度に洗練された芸術の世界にのみ生き残っている。

(解答番号16)

歌舞伎の「見立てもの」などは、当世風の人物に置き換わっている。もとの人物が誰なのかを知らずに見ても理解できる。

(解答番号17)

茶の湯の真髄は、小さなもののなかにこそ雄大なものが見えるという見立ての精神である。

問題3 次の文章を読んで、後の各問に答えよ。

人間は実体がないものでも、形をとらえる視覚の能力をもつ。ノートに一筆で円を描いても、これを見る人の感じ方はさまざまである。平面上に描かれた幾何学的な円形の線や円形に切り抜かれた球状の形を思い浮かべる人もいれば、中身のつまったボールや地球のような球体を連想する人もいるだろう。実体のない形はいわば虚の形であり、二十世紀の美術運動はこうした形の概念も彫刻として認めた。

ひとつはキネティック・アートとよばれる動く彫刻である。一九二〇年、ロシアの彫刻家、N・ガボはモーターで廻る黒い箱から突き出た一本の金属棒も彫刻であると宣言した。確かに一本の棒にすぎないが、電源を入れると高速で回転し、中心部が紡錘状に膨らむ。(A)さくしによって視覚的には立体に見える。つまり虚の立体(ネガティブ・ボリュウム)も彫刻の仲間入りし、初のテクノロジー・アートとなった。

また二十世紀最大の彫刻家といわれるヘンリー・ムーアの一連の母子像の作品は、本来膨らみのある腹部にぽっかりと穴があき、向こう側の景色が見えるのである。ムーアは膨らみを表現するために、あえてネガティブに扱い、そのリアクションとしてボリュウムを想起させようとしたのである。ジャコメッティの針金状のやせ細った人体像は、見る人に貧相な思いをさせない。

つまりいずれも虚の空間を高次でとらえ、その反作用としての豊かなボリュウムを表現しようとしたにすぎない。こうした高次のマイナス思考の表現は二十世紀芸術表現の特権ではない。

よく考えてみると日本人は、この見えない虚の形を上手に操りながら芸術や文化を育んできた。日本人の美意識にある侘・寂や幽玄のエスプリは、見るもの全てを語らないマイナスの美学にある。例えば檀の壁面に老松だけの簡素な能舞台と、現実の再現性を重視した西洋のオペラの写実の舞台とはせいはいんたいである。

茶の湯の世界での茶碗のひび割れを景色と称し、自然の風景の映しとする象徴性と見立ての精神性は、虚の形に相通ずるのではないだろうか。茶室に活ける花はわずか一、二輪であるが、この対極の象徴性が野一面の花と等価であり、精神性でははるかに高次元の心である。

これら日本の先人たちが残した精神性は、有と無の対峙した関係を昇華した虚の形であり、この(C)は現代に通じる芸術の心ではなからうか。

(三井秀樹『形とデザインを考える60章』、原文を一部修正)

問1 二重傍線部(A)と(B)を漢字にしたときに含まれるものと同じ漢字を含む語句を、次の各群の①～④の中から、一つずつ選べ。(解答番号18、解答番号19)

(解答番号18)

(A)さくし

- ① 思索 ② 倒錯 ③ 削除 ④ 趣旨

(解答番号19)

(B)せいはいたい

- ① 対応 ② 事件 ③ 自立 ④ 体現

問2 空欄（C）に入る語句として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

(解答番号20)

① マイナス思考の精神

② 茶の湯の精神

③ とらえどころのない表現

④ 二十世紀芸術表現

問3 次の解答番号21～24の文章を読み、本文の内容と一致するものには「①」を、そうでないものには「②」を、それぞれマークしなさい。(解答番号21～24)

(解答番号21)

ジャコメッティの針金状の人体像は、回転させることで豊かなポリウムを見せる。

(解答番号22)

空間や形をネガティブに扱うマイナス思考の表現は、N・ガボによって初めて二十世紀芸術表現に登場した。

(解答番号23)

現実の再現性を重視しない能舞台は、茶の湯の世界とも通ずる虚の空間を形成している。

(解答番号24)

日本人には、自然の風景をありのままに再現しようとする美意識がある。